

歴史と伝統が追い風になる

研究推進部長 丹生 憲一

7月29日(水)75回生に向けて、大西伸弘前校長先生による特別講演「柏原高校の歴史」を開催しました。明治30年(1897)、兵庫県下で4番目の旧制中学校として創立された背景に、田艇吉(阪鶴鉄道開設)、田健治郎(台湾総督)らの偉人を輩出した地域の教育熱があったことに感謝しようという話。第二代校長、大江磯吉が目指した自由、平等の理想の学園。そこで招かれた音楽教師、犬童球溪(「旅愁」の作詞者)は当時の生徒たちに受け入れられず、心を病んで新潟女学校へ転任したこと。その後、柏原中学の校歌作詞を依頼された時には快く引き受けた話をされました。(現在の校歌の作曲者は山田耕筰、作詞は富田砕花です)また、大正時代にすでにイギリス人の英語教師による授業が行われていたこと。1966年から半世紀以上にわたるアメリカワシントン州ケント市・オーバーン市と、長期交換留学が続いていることにも触れられました。4万人を超える卒業生の中には、第47代総理大臣の芦田均、文部大臣の有田喜一、女流作家の細見綾子、画家の笹倉鉄平、シャープ社長の野村勝明、コニカミノルタ社長の山名昌衛…と各界で著名な方々がおられます。「文武両道」の校風の下、かつて野球部は選抜大会に出場、女学校時代の籠球部(バスケットボール部)は全国大会に進出していたということです。最後に、皆さんに対するエールとして「学びの場は校内だけではない」「地域で学ぼう」「海外に出よう」「仲間を大切に」「あらゆることにチャレンジしよう」という言葉をいただいています。…メモを取らずに聞いていた人のために、おさらいしておきました。

現在、本校が文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)」の指定を受けているのは、大西先生のご尽力によるところが大きいことを書き添えておきます。着任されてから4年間、「スーパー・グローバル・ハイスクール・アソシエイト校」という指定を受けながら(「アソシエイト」とは「次点」)、正真正銘の「Super Global High School(SGH)」になるべく、生徒や教員が始めようとしたことを後押しし、「二兎を追う者は一兎をも得ず」を逆手にとって、「三兎を追え!」と鼓舞されました。「研究推進部」を新たに設置し、探究活動を推進する部署を作ったのも大西先生です。ちなみに、現在**K★ing**の執筆に精力的な吉田先生も、学年団に所属しながらSGH獲得のために奮闘していた一人で、「丹波からTAMBAへ」というキャッチコピーの生みの親でもあります。数年前、「幸せの国、ブータンに行きましょう!」という生徒の声を真剣に(半分冗談で)取り上げたとき、賛同してくれたのは吉田先生で、「行ってきなさい」と背中を押してくれたのは大西先生でした。ブータンのタクツァン寺院で捧げた祈りが現在の文部科学省指定につながったと信じています。…柏原高校の歴史の一部になっている人は、身近にもいらっしゃるのですよ。その一人一人が、皆さんの背中を「後押し」して「追い風」となってくれるのです。明日からは、つかの間の夏休み。追い風を感じながら、それぞれの夏を楽しんでください。(大西先生の講演のスライドを近日中に学校HPの「教員動画」にアップしておきます)



7月28日（火）探究Ⅱ「オンライン授業の可能性と問題点」

研究推進部 吉田 究

2年生知の探究コース「探究Ⅱ」はようやく（ひとまず）8つのグループに分かれ、それぞれ探究活動をスタートさせました。この日、「教育」班に分類される2つのグループは、兵庫教育大学の関達也教授からお話を伺い、自分たちの関心の在処、今後の活動の方針を整理し、再確認する作業を行いました。

講義は、「教えて学ばせる授業の終焉か、あるいは完成か？ーオンライン授業の可能性と問題点ー」という超刺激的なタイトル。大学でも行われるオンライン授業は、学生たちの「満足度」は（「自由な」スタイルで受講することができるからか）高く、また、教える教授の側にしても（目の前にいる学生の表情を気にせず展開できるからか）「快適な」時間なのだけれど、関先生は、「一方通行の性格が強化され（中略）このテクノロジーは今のところ、授業では有害無益としか思えません」と断言なさいます。

「教えて学ばせる授業の終焉か、あるいは完成か？」というメインタイトルにあるとおり、オンライン授業は「我々」の「授業」の、あるいは「教育」の根幹を揺るがすような性質を持ったものです。「我々」はそれを明確には言語化できないまでも、その事実についてすら気付いたり、あるいはまるっきり気付かなかったり、します。私はもちろん「気付く」ことこそが（まずは）大事で、「気付かない」人が例えばいくらAIの台頭を憂えてみたところで、「いやいや、あなたこそがAIによって仕事を失うんですよ」と意地悪を言って差しあげたくなります。（もちろん、こんな「生産性」の低い私こそが真っ先にそうなるのかもしれませんが…。(´_ゝ`);)

講義の後、「教育班」の生徒たち（8名）の声を聞くことは（私は）できなかったのですが、「教育班」担当のH中先生は随分と興奮しておられ、その日の放課後も、翌朝も、この講義の余韻でふたり盛り上がりました。

「教育班」のメンバーたちは全校生を対象にオンライン授業に関するアンケートを実施し、生徒の皆さんにはすでに協力してもらっています。できれば今後、先生方に対しても同趣旨のアンケートを行い、ともにこれからの「新しい授業」の姿を模索できればという話もH中先生はしておられました。それこそがいわゆる「第2波」「第3波」に対しての私たちの「備え」であり、今回の休校期間の「学び」ではないかと私も思います。

ところで、講義の中で私にとって最も印象的だったのは関先生のこんな言葉です。

「今回の講義内容の一部は、大学院の授業でしている話です。ですがそれ以外の部分は、今回の依頼をいただき、オンライン授業について、今まさに自分が考えていることをまとめたものです。答えや結論はありません。私自身が、今まさに探究していることを今日はお伝えしたつもりです。」

私、期末考査中に3学年の希望者を対象に小論文講座を開きました。その中で、「簡単に結論を出さないこと、立ち止まること、積極的に躊躇うことが大事だ」という話をしました。

先週、ALS患者「囑託殺人」のニュースが報じられ、巷では大きな話題となっています。2年生の国語表現ではそれをテーマに扱っているのですが、私、安楽死を求める風潮を非難したいのですが、でも、どうやってそれを否定していいのか、なかなかわからないのです。というか、なんで自分がそれに違和感を覚えるのかさえも。

ただ一つ、私の躊躇いは、「急いで結論を出そうとすること」に対してではないかと思うのです。合理的・効率的であること、それを至上とし盲信することに対して、頭の回転の遅い私は追いつけないところがあります。

ですが、私は、頭の回転が遅いことを必ずしも恥じてはいません。劣等感も持っていません。いえ、むしろ、それは「立ち止まることのできる能力」「逡巡できる力」だとさえ思っています。

今回の講義の中でも、合理化、効率化を図る今の風潮がオンライン授業を求め、本来愚直とも言える性質を持つはずの「学び」を軽視することになっているのではないかといった指摘がありました。29日、大西伸弘前校長先生の話聞いた1年生も覚えてますよね？ 大西先生が「勉強はまずは鍛錬が大事だ」って仰ってたのを。

「学び」とは、単に何かを知る、答えがわかる、早く問題が解けることではないのです。AIが棋士の力を圧倒的に上回ったとされる将棋の世界でも、ただ勝つこと、強いことだけが将棋ではないと棋士たちはすでに気付

いています。藤井聡太くんの「3一銀」がAIの能力を上回る「手」であったと絶讃されていますが、そんなニュースを見て無邪気に喜んでいただけでは、我々は、これからの世界で生存の価値を見失ってしまうでしょう。（ちなみに藤井聡太くんが初戴冠の翌朝、色紙に書いた文字は「探究」でした。）

もちろんつらいことですが、今年当初からの新型コロナ禍は私たちにとって最高に「良い教材」です。だって、自分で考えることができるんですから。そんなことを考えさせられた関先生の講義でした。

